



図4 再捕されたヒラメの全長の比較

おわりに

これまでのヒラメ種苗放流は、そのほとんどが育成していた水槽から取り揚げて直ちに放流していたが、今回行ったように9日程度でも放流する天然海域へ馴致してやることによって放流魚の潜砂能力や捕食能力が高められることがわかった。また、その後の市場調査から求めた回収率にも差がみられることから、放流種苗の種苗性を高めてやるのが放流初期の生残率向上に重要であることも推察された。

今後、小浜湾へ放流場所を変更し、種苗性試験

ではヒラメを食害魚とした被食試験や小浜湾の天然ヒラメ稚魚の胃内容物調査で多数観察されるハゼ科魚類を用いた試験を加え、種苗性評価のための試験方法についても検討する。放流前に種苗性を的確に評価することで、放流効果を高める育成手法を開発する必要がある。

【引用文献】

Yamashita Y. and M. Aritaki (2010) Stock enhancement of Japanese flounder in Japan. In: Daniels HV and W Watanabe (eds) Practical Flatfish Culture and Stock Enhancement. Wiley-Blackwell, Ames. 239-251.

古田晋平, 西田輝巳, 山田秀明, 富永貴幸, 渡部俊明, 平野誠師 (1992) 鳥取県中西部海域におけるヒラメ放流稚魚と天然稚魚の追跡調査結果に基づく放流技術的考察. 鳥取水試報告, 33, 61-82.

北海道・他 (2000) 平成7年度～平成11年度放流技術開発事業総括報告書 (異体類). 255pp.

編集後記

前任者の異動により、今号から編集を担当することになりました。不慣れで至らないところがあるかもしれませんが、よろしくお願いたします。

今号には、本誌へのアンケートを同封させていただきました。読者の皆様のご要望やご感想をお聞きし、皆様にとって、より読みやすく、分かりやすく、楽しい誌面となるよう、本誌を進化させていきたいと考えていますので、ご協力のほど、よろしくお願いたします。

アンケートはホームページからもお答えいただけます。http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/rt

携帯電話の方はこちらから→



(日本海区水産研究所業務推進課長)

発行：独立行政法人水産総合研究センター

編集：独立行政法人水産総合研究センター日本海区水産研究所
〒951-8121 新潟市中央区水道町1-5939-22
電話：025-228-0451(代) FAX：025-224-0950
http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/